

# 山と博物館

第29巻 第8号

1984年8月25日

大町山岳博物館



ニッコウキスゲと前穂高岳

撮影 山崎佐喜治

## 涼風所感

私は山の自然が好きだが、見るよりは撮る方だ。写真は自然をいためないから、根こそぎ採るよりは増しな趣味だと思っている。上の写真もその一枚で、北穂南稜からの前穂とニッコウキスゲである。ガレた沢の瘦せ地によくぞ立派に咲くものだと感心し、涼風さえ感ずる。そしてこの花は前穂の峰々を背景にしてこそ美しいのだと私は思う。

近くの人がコマクサを鉢植えにして自慢げに愛でている。また、山が好きで信州に良き妻を得た隣りの男は「山のもものは山にあつてこそ美しい。鉢でいためつける者の気が知れない」という。確かに山採りの盆栽の味が忘れられず、庭いっぱい並べてみても、山の自然には程遠い。自然に勝る自然はない。

最近では自然科学館ばかりである。自治体の威信にかけて競っている観すらある。地方の時代……地域文化の殿堂たるは望むところだが、どうも借り物で足が地に着かぬものや、「見て、さわって、参加して」の名のもと、遊園地のおもちゃまがいのものまで雑多だ。

一昨年、大英博物館を見た。世界の財宝を一堂に集めたと思うばかりの豪華さだが、いまひとつ、しっくり来なかつた。何故ギリシヤのパルテノン神殿の壁を飾た彫刻がはぎとられて英国に有るのかである。一方、最近中国で、万里の長城のレンガを持ち出して、わが家を建てる材にしたという話も耳にした。文化財保護のあり方は難かしいが、政治や経済力で略奪的に文化財が移され、観光の目玉にされるのはいただけない。遺物は遺跡にあつてこそ価値がある。前後してマンチェスターの博物館を見た。早朝から近くの学校の子供たちが押しかけて、地域産業の技術史や科学史の勉強をしていた。地域に根ざす立派な館だと思つた。大町にも五博が咲きそろつた。小さな市には過ぎる数だが、いずれも現地に立脚するサイドミュージアムだ。美しく咲いて、永遠に涼風を送り続けてほしいものだ。

(山博囑託員 山崎佐喜治)

# 青少年と山

## 高橋 伸行

若者達の、山岳会離れを耳にするようになってから久しい。それはちょうど、日本経済の高度成長期にあり、若者達のあいだに誤った生きがい論が流行した時期と重なっている。その延長が、若者たちの山離れ現象であろう。それは、夏の北アルプスの稜線に立つてみるだけでも実感できる状況である。

教員に引率された中・高校生の集団登山を除けば、家族連れや中高年登山者に比して若者の姿はあまりにも少ない。

ある大企業の労組の、青年を対象としたアンケートで、「休日やどう過ごすか、過したいか」に対する回答には、「ドライブ」が上位を占めていたという。

マイカーやオートバイで疾駆する快適さに比べたら、汗まみれで喘登する山登りのイメージは、「カッコワルイ」。スポーツの最たるものであるそのスタイルもかっこわるさに輪をかけている。スピード、行動半径の大きさという機械的進化に対して、自分の足で一步一步距離と高度をかちとる登山は、進化に逆行しているかにも見える。

こうしたイメージ的なものに加えて、楽しいことだけが生きがいであって、つらいことと苦勞なことは避けてしまおうという、プラグマチズムの生きがい論の影響も無視できないと思う。

これとあわせて、高度成長期に入っていつそうきびしく追求されてきた、様々な職場の管理方式で、青年たちの社会生活からゆとりが失われて行ったことも、山離れの潜在的原因となっている。よく職場で語られるエピソードにお

稜線を行く前方は白馬岳



花見の話がある。かつては大企業の職場でも、花見の時期になると、先発隊が終業前からシートをかついで場所取りに行き、女子職員はお勝手に料理づくりに精を出す、といった光景が職制ぐるみで存在していた。今どきこんな馬鹿げたことの許されている職場はひとつもないだろう。ムダはギリギリまで排除され、合理化は徹底している。しかし人間生活には必要なムダというものはあって、そうしたムダがなくなるとは、文化など発展する余地はなくなってしまう。登山などはムダの最たるものに違いない。人間生活を充実させるものは、仕事よりも遊びにこそ多くのものがあると思うのだが、遊びは「ムダ」という権力者の思想は今も変わっていないようだ。生活を楽しくむのに必要なゆとりをなさば、いちばんゆとりを必要とする登山のようなスポーツをやりたくしているといえる。

今年の二月、総理府が発表した「世界青年意識調査」によれば、世界十一カ国のなかで、学生生活についても、職場生活についても、「満足している」という数がいちばん少ないのが日本で、「不満だ」という声がいちばん多いのも日本となっている。これは現代の日本の青少年が夢をもてない状況におかれていることを示している。多少でもまともにこの国のことを考えるならば、外国へ心を売り渡した元首相が、実質的に政治を動かしているということと一つだけをとって見ても、如実に政治の反動化が進んでいる現状では、青少年にとって明るい展望も夢も、持てる時代にならない限り、のびのびと山へ登れる環境も作り出せないし、青少年の山離れを基本的に防ぐことは出来ないだろうと思う。

テンジンの言葉だったと思うが、「旅は人生のようなものだ」というのがあった。旅を山に置きかえても同じだと思う。山登りの苦勞・悪条件の苦痛に耐え、それを克服するという、自分自身とのたたかいは、人生におけ

るそれと似ているし、山登りを通じて得た力は、人生をまっとうする上で出会う様々な困難に耐え、それにうちかつ力にもなるだろう。またよりよい人生を生き抜いたかたいは、豊かな登山を保証する力にもなるだろう。

私にとっても、登山が私にもたらしてくれたものは、「めったなことでは死にはしないぞ」という生きることへの自信であった。この自信めいたものは、自分自身とのたたかいによって得られたものであった。

私達が、この十年来、三十数回にわたり行ってきた、青少年を対象にした冒険学校は、この「自分とたたかう力」を身につけさせることをねらいとした催しである。それは日常生活での「たくましい子供」をつくることでもあった。

ザイルを使って川を渡る。着のみ着のまま山をたどり、火を起こし、飯をつくり、小屋掛をして山中に泊る。道のない峰への登高。積雪期には、雪稜のラッセル登高、そして大滑降。雪洞を掘って泊り、雪の高原でのオリエンテーリング。高原上の起伏や樹林帯が視界を奪うなかで、子供達だけの必死の彷徨でもあった。煙い小屋での自炊、手の千切れるような流水での洗いの。

あるいは白馬山麓での、カウボーイ方式のキャンプと登山。こうした冒険学校の卒業生は、参加の成果として、(1)神経が図太くなった。(2)忍耐がよくなった。(3)自然を大切にすることが育った……等と語っている。学校という場と、異なり、不特定多数の子供たちを、短期間、年三回行なうだけで、ねらいにそった成長をみせてくれたことは、山を舞台にした教育の効果を物語っているし、また冒険学校の卒業生が他の高校生と混合して作業するときに、目立って自立性を発揮し、実践力を持っていることを目にもできた。

また見逃せないのは、山登りの忍耐が、つくりへの効果であった。近頃の青少年にとつて、困苦を耐え忍ぶことの弱さが指摘されている。

山登りの優れたところは、進んで苦勞あるいは困難を求めることであり、そして先ずそれらの困苦に耐える、耐えつつ克服するということ。「耐える」という視点が欠かせないのである。我慢をするということが先であって、我慢が出来なくっては、自分自身にたたかいて勝つことができない。これが欠けていると子供達に自立の力をつけることが出来ないと思う。大人達の誤った権利意識の影響で、労苦はなんでもいとうというのでなく、必要な苦勞や労働をいとわぬ生活姿勢を身につけさせることであつた。

余談になるが、こうした冒険学校の指導員の、資格をもっているのは登山家(者)だというのが私の考えである。私の経営する山荘で、多くの青少年団体に接しての実感でもある。青少年にキャンプを行わせるという計画でありながら、自身で設営が出来ず、撤収しても濡った天幕、寝袋をまるめて帰ってしまった。シーズンが終ると、ポールは数が足りず長さも合わなくなつて翌シーズンには使えないものが何張も出る。自炊」ということは、食品の調達一切を宿に依頼するばかりでなく、野菜類はすつかり刻んで渡してくれるもの、ご飯は炊いて出してくれるものと期待されているのは面喰らつてしまう。そして汚した鍋、食器類を洗つて返還することに気が付かない。ファイヤー・ストームの薪を組んであげるのはよいとして、「火をつけてくれないのか」と催促されたり、パーベキューを行うか材料を用意してくれということ、皿と箸を持って出来るのを待っていることだつたりすると、お客様のご気嫌をそねねずにお断わりすることに冷汗をかく有様である。

口では「子供の自主性を尊重して、子供達自身で遊びを計画させる」と立派なことを云うが、おんぶにだつこの主催者に子供の自主性を発揮させられるのかと思うのである。キャンプになれた少年団などでも、所定の条件を満たした場所でのキャンプであつて、

登山のようにそこにあるがままの自然の条件にあわせて暮営をするというのではない。ある特殊学級の一例だが、「目的の地までは歩かせます。車は要りません」「薪は要りません。現地調達(流木や枯枝)いたします」「自炊用具は要りません。全部持参しています」等々の指導をされる、一見して山男とわかるその先生には、流石に山やと感心したのであつた。

登山では、行動面に重点をおかざるを得ない以上、生活面(食事、入浴、就寝、くつろぎ……)を合理化する必要にせまられる。生活面を合理化するということは、ムダを省くことであり、行動を機敏にすることである。食事ののろい子供に、すぎなだけの時間をかけて食事をさせるといふ保育上の考え方は別の躰が要求される。この合理化、ムダの省略は、前にふれた日常生活の合理化・ムダの排除とは異質のものである。

そういう努力も含めて、子供達が真に冒険の喜びを味わうのは、冒険をやりとげた結果に対してよりも、むしろ冒険そのものに払った苦勞や犠牲に対して味わう満足感なのである。必要な苦勞を払うことを通じてのみ、それを成しとげる喜びを味わえるのだということを得得させるのにも、登山はよい訓練である。

さて、先に登山が進化に逆行しているかに見える」と書いたが、人間が歩行の習慣を捨ててきたことが、成人病などの増加、国民半病人化などをもたらしているという指摘がある(今野道勝「家畜になった日本人」山と渓谷社)その意味では、逆行はむしろ日常的に車に頼ることで、人間の身体的諸機能を退化(悪化)させているほうにこそあるといえよう。運動の中でも、人間にとつて最も根本的で日常的で容易な、歩行を基礎にしている登山こそ優れたスポーツでは無いだろうか。

昔は、健康のために山登りをするということなどなかったが、今日では生活環境の悪化、



落日と冒険学校の生徒

いのに、あんな大きな荷物をついで……程度の認識しかなかったのである。生れつき山が好きで好きでしようがないなどという人がいたら、むしろ異常なのであつて、現に山登りをしている人々は、かつて何らかのきっかけがあつて山登りを始めた筈である。青少年の山離れは、青少年に責任があるのではなく、私達成人の働きかけ、きっかけづくりが足りないであり、悪条件を排除してやる努力の足りなさにこそあると思う。山に入った若者は、山への関心の薄い人であつても、自然の美しさ、大らかさ、きびしさには必ず共鳴してくれるはずであるし、そこでの人との触れ合いに感じてくれないはずがない。

山へ行った若者のすべてが山好きになるとは限らない。しかし嫌いにしてしまうことだけは避けなくてはならない。リーダーの豊かな心配りが大切である。「初歩の暗闇を照らすのは、中程と終り」(デイドロ「ラモーの甥」)である。山岳会からの若者離れに無関係の山岳会がある。それは平均年齢二十才代の会員数、四桁に迫る大山岳会が存在する。指導者の姿勢であるに違いない。青少年の山離れは、青少年ではなく私達の問題であり、責任であるところから考えなくてはならないことなのである。

(山岳スポーツ研究所)

食品公害、仕事のストレスなどなど、健康を守るのが国民誰れもの関心事となつてきている。健康のために山登りをすることも、積極的な意味をもつようになつてきたし、昨今注目を浴びている森林浴も加えると、登山はカッコーワルイどころか、現代人の直面している問題意識にもつとも適合したスポーツとすらいえるかもしれない。かつて私達が、山のよさをひとりに説いていた頃よりは、はるかに説得力のある山へのさそいかげが出来るわけで、大いに山登りをすすめて行きたいと思う。私達の若い頃だつて、山といえは「この暑

# 日本最古の岩石

木船清

アジア大陸の東縁に位置し、大平洋と大陸の境を島孤状にのびる日本の基盤をつくっている岩石については、多くの研究者が昔から関心を寄せてきた。

地質時代の年代の決め方には「化石」などを中心と比較する相対的年年代と放射性同位元素を使って決定する絶対的年年代がある。前者は火成岩類などには適用できないし、後者は放射性元素を含まない岩石には適用できないので、その長所・短所を相補して、地質年代の決定をしているのが現状である。

一 化石から見た日本最古の岩石・地層  
昭和五十五年四月、北アルプス焼岳の西方にある、岐阜県吉城郡土宝村福地の一の谷で、日本最古の化石が発見された。その化石は「パラエオレペルディチア」(Paraeolepeltia)と呼ばれる貝形虫の仲間、筑波大院生の安達修子さんによって発見された。その他にも名

古屋大院生の古谷裕さんにより放散虫のセラトイキスクム(Ceratoliscum)や環虫類が発見されたことにより、日本ではじめてオルドビス紀(五億四千万年前)の地層があったことがわかった。

それまで日本最古の化石は、北上山地をはじめ西南日本の黒瀬川構造帯などで見られる古生代シルル紀(約四億三千万年前)のハチノスサンゴを含む地層でした。

福地付近には、石灰岩や凝灰岩・石灰質頁岩が東北東から西南西に走り、北傾斜で分布します。標式地は、高原川支流、尾添川の一

の谷で、この付近では、吉城層(貝形虫類・放散虫・オルドビス紀)一重ヶ根(三葉虫・シルル紀)福地層群(サンゴ・層孔虫・三葉虫・デボン紀)一の谷層群(フズリナ・四射サンゴ・石灰藻・腕足類・石灰紀) 空山層群・水ヶ屋層群(フズリナ・二疊紀)など約五億二千万年にわたって、古生代の化石を見ることができ、特に一の谷は化石の宝庫になっているので天然記念物の指定区域になっている。

## 二 放射性同位元素からみた日本最古の岩石

岐阜県加茂郡七宗町上麻生の飛騨川左岸で見られる礫岩層中の片麻岩礫がそれである。礫岩層は全部で四枚あり、美濃帯(第一図)に属する二疊紀の地層には含まれていない。この付近の地層は硬砂岩・黒色頁岩・層状チャート及び礫岩・石灰岩などから構成される。石灰岩からは二疊紀を示すフズリナが、頁岩と接する



上麻生の礫岩の見える飛騨川

中期の変成作用でこれ等の礫は生成されたものと推定される。即ち上麻生の片麻岩礫は、先カンブリア時代を示す岩石として、日本最古の岩石である。

### (2) 正珪岩礫の示すもの

正珪岩礫は中国や朝鮮・北米・スカンジナビアなどの大陸地域に多く見られる砂岩で、石英が九五%以上を占める。砂粒のほとんどが完全に円磨されていることから、片麻岩や花崗岩からなる安定大陸でそれ等の岩石が長期間にわたって風化を受けた結果、風化に強い石英のみが残され固結した岩石である。特に先カンブリア末の全世界的に進行した準平原化と乾燥気候のもとでつくられた事が知られている。この正珪岩礫も片麻岩礫と同様、北方に正珪岩を供給した先カンブリアの岩石からなる大陸があったことを示している。

なお四万帯に属する地層の中にも正珪岩が発見された事実を示しており、今の南方洋上にも古い大陸があったのではないかと推定され黒潮大陸と呼ばれている。

以上に加え上麻生礫と対比される片麻岩が中国や朝鮮に分布していること、また地震波による地殻構造の解析結果から、日本列島中部の地下五・二十五キロに片麻岩などの存在を示す層が推定される。これ等のことから麻生片麻岩礫を供給した大陸の一部が飛騨帯であり、その延長は朝鮮、中国へとのびる一方、日本列島地下深部にも存在するのでないかと推定されているが、今後の研究に多くの期待をまつのが現状である。

(池田町会染小学校)

山と博物館 第29巻 第8号  
発行所 長野県大町市 TEL220-2115 発行 一九八四年八月二十五日  
印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館  
定価 年額1,100円(送料共) 切手不可  
郵便振替口座番号 長野四二二二九九三



第一図 中部日本の地質構造区分